

日銀支店長が語る

経済よもやま話

第9回 山形県の紅花文化



日本銀行仙台支店長 岡山 和裕

日本銀行仙台支店は、宮城県だけでなく、岩手県、山形県も業務区域となっている。このため、私の公私の行動は、宮城県だけでなく、岩手県、山形県にも及ぶ。

そのうち、山形県についてだが、山形県と言えば、最上川、山形花笠まつり、紅花、山寺などが有名だ。

そこで、私はまずは山寺に行ってみた。山寺は慈覚大師が建立し、本山延暦寺から不滅の法灯が分けられたという。また、松尾芭蕉が「閑さや岩にしみ入る 蟬の声」を詠んだことでも有名だ。

私が行った時は梅雨の時期で雨。山門から1015段の石段があるらしく、一段登るごとに煩惱が消えていくと言われる修行の道とのこと。入り口で「今日は涼しくて良いですね」とお話したところ、「いやいや、皆さん、降りてこられるころには汗だくになりますよ」とのご返答。一番上まで登ると、仰るとおり汗だくだ。傘を差していたのに、差していない感じだ。上まで登るととても素晴らしい眺めだ。煩惱が消えたかどうかは分からないが(笑)。

麓まで下りて車で回っていると、紅花まつりをちょうどやっていた。このため、その地域で最多量級の紅花生産者だった農家の大規模住宅を訪れた。そこで、紅花についても色々と知ることができた。①赤は古くから呪術的、祭祀的な意味合いを持っていて、人生の節目の儀式では「紅」が使われていたこと。②もっとも、紅花の成分の99%は黄色で、紅色は1%未満であること。③紅花は赤くなる前の黄色の時点で収穫しないと、紅色を抽出できないこと。

こうしたことから、「紅」の希少価値が高かった

ということらしい。

また、山形市の夏祭りの花笠まつりは、何と云っても、花笠に目を引かれる。この花笠に飾られている花は「紅花」を表現したものらしい。花笠まつりも見に行ったが、正しく老若男女の地元の方々が、明るく踊っておられる。

そして色々と調べてみると、こうした「山寺」、「紅花」、「山形花笠まつり」は繋がっていることが分かった。日本遺産ポータルサイトによると、紅花は、山寺を建立した慈覚大師などにより、この地に伝わったという。

加えて、紅花は最上川（山形県のほとんどの市町村を流れている）を下って、北前船で上方に運ばれたほか、比叡山と古くから関係のある山寺の存在が、比叡山と縁故の深い「近江商人」たちをこの地に惹きつけたとのことだ。すなわち、山寺が紅花文化を支えたということらしい。

そこで考えたことは、経済活動は過去からの結びつきや物流の利便性が大きく作用するものだという。何も知らないと、この地域でなぜこの産業が活発になったか分からないことも、その背景や要因を探ってみると、かなり奥深いものがある。これは現代にも通ずるのではないか。

岡山 和裕氏 プロフィール

1969年（昭和44年）生まれ
兵庫県出身。本店15部署のうち8部署を経験したオールラウンダー。東日本大震災では、金融機構局で被災金融機関との連携役を担ったほか、熊本地震では決済機構局業務継続企画課長として現場を指揮。前橋支店長、業務局参事役等を経て、仙台支店長に就任